

「宇宙研究」と「自治体との連携」の実績を活かして、 「宇宙」で地域と大学をブランド化する。

「宇宙」を地域貢献に活かす

福井工業大学が2016年に発足させた「ふくいPHOENIXプロジェクト」は、宇宙と観光・産業を結びつけ、地域の活性化を目指している。プロジェクトのリーダーを務めるのは、工学部機械工学科の羽木秀樹教授だ。

「福井工大は、あわら市のあわらキャンパスにある北陸最大のパラポラアンテナを核に、宇宙研究に力を入れてきました。また、多くの自治体と連携し地域貢献に努めてきた自負もある。そこから、『宇宙』を地域貢献に活かせないかという発想が出てきました」

ちょうど福井県も、県民衛星の打ち上げを計画したり福井駅前にプラネタリウムを作ったりと、『宇宙』の活用を考えていたので、連携してやっていこうということになった。

星空観光と宇宙産業

「福井工大に工学部以外の学部も出来たところで、デザインや経済など様々な切り口で取り組めるようになったのも、いいタイミングでした」
プロジェクトのひとつの切り口は「観光」。夜が暗く空気がきれいな福井県は、星がよく見える。それを活かして「星空を観光資源化しよう」というのだ。

星空観光を核にすることで、宿泊して県内を周遊してもらえるようにしたい。山登りやスキー、田舎の生活体験などと組み合わせた体験型のモデルコースを提案して、子どもたちや若い人たちに「福井県は、都会にはない面白そうなことができる」と思ってもらえるようにアピールしたいという。

「子どもの頃に福井で楽しい体験をしてもらえば、福井に継続して人を呼び込むことが出来ると思うんです。持続が可能なんだ、経済的に成り立つんだ、ということを地元で示すことが出来れば、自治体と

連携してやっていけると考えています」

プロジェクトでは超小型人工衛星の打ち上げも計画されている。打ち上げを通じて福井に宇宙産業を創出する計画だ。ひとつは「衛星をつくる産業」。福井県が進める県民衛星の打ち上げと連携して、県内企業が腕を磨いて衛星製造地域として売り出していく。もうひとつは「衛星データを活用した産業」。現在、あわらキャンパスのアンテナで受信できる衛星データを、防災や農業に活かす研究を進めているが、大学の超小型人工衛星では、既存の衛星とは違うデータを取りたいと考えている。夜の天気や暗さなど星空観光に特化したデータを集める予定だ。

星空に夢を懸ける

「でもね、衛星などの設備も大事だけど人も大事なんです」
衛星の打ち上げは大学だけでも出来るが、観光ブランド化は地域の人がその気になてくれないければ無理だからだ。

「人や組織を動かすのは難しいけれど、大学が自治体の接着剤、潤滑油になればいいと思っています。地域貢献は地方大学の使命ですから。将来『昔、ふくいPHOENIXプロジェクトというのを立ち上げた人がいてね、それがきっかけで、今のように星空を求めてたくさんの人が福井に来てくれるようになったんだよ』みたいな話が出来たら最高じゃないですか。僕はその夢に懸けてるんですよ」



直径10メートルのパラポラアンテナ／あわらキャンパス

広告



福井工業大学

Fukui University of Technology

〒910-8505 福井県福井市学園3丁目6番1号 [フリーコール]0120-291-780 [ホームページ]http://www.fukui-ut.ac.jp/